



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	Burning mouth syndrome患者における唾液中ストレスマーカーおよび自律神経活動の検討 [全文の要約]
Author(s)	藤川, 優理絵
Description	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。 https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(歯学)
Dissertation Number	甲第16465号
Issue Date	2025-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/95179
Type	doctoral thesis
File Information	Yurie_Fujikawa_summary.pdf



学位論文内容の要約

学位論文題目

Burning mouth syndrome 患者における
唾液中ストレスマーカーおよび自律神経活動の
検討

博士の専攻分野名称 博士（歯学） 氏名 藤川 優理絵

Burning mouth syndrome (BMS) は国際口腔顔面痛分類第 1 版 (ICOP-1) にて “3 か月を超えて、かつ 1 日 2 時間を超えて連日再発を繰り返す、口腔内の灼熱痛あるいは異常感覚で、臨床的な診察、検査で明らかな原因病変を認めないもの” と定義される。未だその病態や有効な治療法ははっきりとは同定されておらず、痛みが慢性化して患者の QOL にも深刻な影響を及ぼす。BMS の原因は多因子性と言われているが、以前から BMS の一要因としてストレスとの関連も示唆されている。生体のストレスに反応する 2 つの主な反応経路には、視床下部-下垂体-副腎皮質 (HPA axis) と交感神経-副腎髄質 (SAM axis) があり、コルチゾール (以下: COR) は内分泌系の活動を反映するストレスマーカーであり、一方アミラーゼ (以下: AMY) は自律神経活動のストレスマーカーと考えられている。これまで生体のストレス反応と BMS との関係について、治療経過を含め総合的に検討した報告は、著者らが渉猟する限りなかった。

そこで著者らは、BMS に対する病態および原因の検索と、より効率的な治療法を見出すことを目的とし、Numerical Rating Scale (NRS)、知覚・痛覚定量分析装置 (Pain Vision®) を用いた疼痛の程度、唾液中コルチゾール (COR)、 α -アミラーゼ (α -AMY) 濃度、および自律神経活動を経時的に測定することで、BMS と生体のストレス反応などの関係を総合的に検討した。

対象は、口腔内の疼痛を主訴に北海道大学病院歯科診療センターを受診し、BMS と診断された BMS 群: 36 例および疼痛を伴わない患者・健常者の対照群: 14 例とした。BMS 群の治療前および初期治療後に NRS、痛み度、唾液中 COR・ α -AMY 濃度、自律神経活動の測定を行い、それぞれの変化を検討した。また初期治療の奏効群と非奏効群での唾液中 COR および α -AMY 濃度および自律神経活動などを比較・検討した。唾液中 COR および α -AMY 濃度の測定には SOMA Cube Reader®を用い、自律神経活動の測定には TAS9 VIEW®を用いた。

BMS 群と対照群の比較では、BMS 群で唾液中 COR 濃度が有意に高かった。BMS の発症や病態は HPA axis などのストレス反応が関与している可能性が示された。初期治療により痛みの NRS、知覚痛覚定量分析装置による痛み度は治療前後で有意に低下し、当科の初期治療の効果がうかがえた。また、初期治療前後に唾液中 COR・ α -AMY 濃度は有意に低下し、BMS の症状および治療効果には心因性ストレス反応などが関連している可能性がある。また、短期的な治療の奏効群において、治療開始後の唾液中 α -AMY 濃度が有意に低下していることを考えると、BMS の経過および症状改善に SAM axis などの生体ストレス反応が関与している可能性が示された。